

各地のたより

熊本県の畜産と畜産環境対策について

熊本県 農林水産部畜産課

課長補佐(経営環境班) 田島 隆 自

1 熊本県の特徴

本県は九州地方のほぼ中央に位置し、面積は約7,405平方キロメートルで、人口は約182万人である(平成20年)。

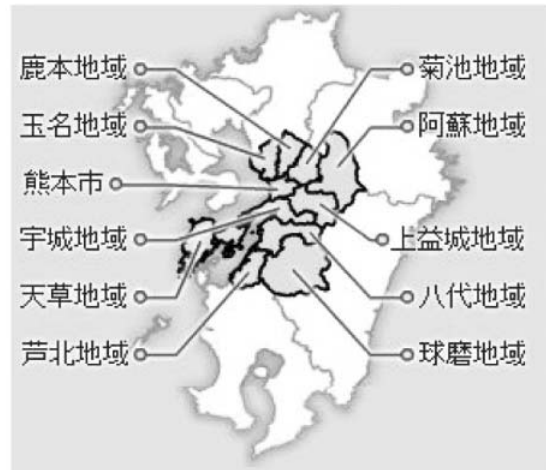
北部は比較的緩やかな山地、東から南にかけては標高1,000メートル級の山々に囲まれ、これらに源を発する菊池川、白川、緑川、球磨川などが菊池平野、熊本平野、八代平野を潤している。西部は有明海、八代海に面し、外洋の東シナ海に続いている。世界に誇るカルデラを持つ雄大な阿蘇を含む「阿蘇くじゅう国立公園」、大小120の美しい島々からなる「雲仙天草国立公園」と2つの国立公園を持ち、素晴らしい自然にあふれている。

気候は概して温暖である。天草地方を除き三方を山に囲まれ、全体的に内陸性気候であり、寒暑の差が大きい。年平均気温は熊本市16℃、阿蘇地方13℃、天草地方17℃程度であり、年間降水量は2,000mm程度だが、山地では3,000mm以上となることもある。

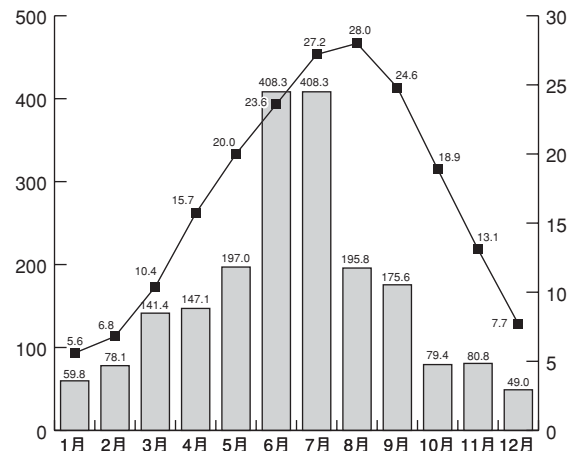
2 熊本県の農業

本県は農業の盛んな地域である。農家数は近年減少傾向にあるが、県内総世帯の11.1%を占めており、全国平均(5.7%)と比較すると高くなっている(平成17年)。基幹的農業従事者数は全国第6位であるが、高齢農業従事者の割合が増加傾向にある(平成17年)。また、農業産出額は全国の3.6%を占め第7位である(平成19年)。

主要品目の生産量で見ると、いぐさ、トマト、宿根カスミソウ、葉たばこが全国第1位となっている。また、県内の農業産出額を作物別に見ると、野菜が33.4%で最も多く、ついで米の14.1%、果実の9.9%、肉用牛の9.7%、乳用牛の8.4%の順となっている(平成19年)。



月別降水量・平均気温(熊本)



3 熊本県の畜産

本県の畜産は、恵まれた自然環境や飼料生産基盤などを生かし、肉用牛・乳用牛を主体とした経営が行われており、菊池、阿蘇、球磨地域などを中心に主産地が形成されている。

農業産出額で見ると、本県農業全体の3,046億円のうち畜産部門は907億円と30%を占め、県農業の重要な部門となっている。また、全国の畜産部門の農業産出額26,231億円のうちの4%を占め、全国第8位の畜産地域である(平成19年)。

畜種別に見ると、肉用牛が294億円（畜産部門における割合32%）、乳用牛が252億円（同28%）、豚が180億円（同20%）、鶏卵が68億円（同8%）、ブロイラーが56億円（同6%）などとなっている。

(1) 肉用牛

本県の肉用牛生産は、飼養戸数が3,560戸、飼養頭数が147,400頭で、それぞれ全国で第7位、第4位である（平成21年）。飼養戸数は減少傾向にあるが、飼養頭数は規模拡大により増加傾向にある。品種は50%は黒毛和種であるほか、褐毛和種が13%おり、全国の褐毛和種の67%が本県で飼養され、全国の中心産地である。黒毛和種については菊池地域および球磨地域、褐毛和種については阿蘇地域を中心に、県下で広く飼養されている。

県では、一定の基準を満たした本県産の牛肉を「くまもと黒毛和牛」「くまもとあか牛」「くまもとの味彩牛（交雑種）」として農業団体とともにブランド化し、消費拡大をはかっている。また、肥育素牛の供給を県外からの導入で補う傾向にあるほか、繁殖農家の高齢化が進展していることから、繁殖専門農家の育成による増頭を推進している。褐毛和種については、消費者の健康志向にマッチし消費の拡大も期待されるものの、経営面で不利な状況にあることから、農業団体と連携して消費拡大や増頭支援などを行っている。

(2) 乳用牛

本県の酪農業は、飼養戸数が790戸、飼養頭数が43,400頭で、それぞれ全国で第5位、第4位であり、西日本最大の酪農地帯である。1戸あたり飼養頭数は54.9頭であり、都府県の平均値を上回り大規模化が進んでいる（平成21年）。酪農業は菊池地域を中心として県下全域で行われているが、阿蘇地域の一部（小国地方）ではジャージー種が多く飼養されている。

配合飼料価格高騰や牛乳の消費低迷などの影響を受け、本県でも最近3年間に100戸以上の酪農家が廃業したほか、飼養頭数、生乳生産量も減少傾向にある。このため県では、生産性向上のため高品



「くまもと黒毛和牛」「くまもとあか牛」「くまもとの味彩牛」ロゴ

質乳牛の導入や、牛乳の消費拡大活動に対する支援などを実施している。また、農業団体による牛乳の輸出の拡大、消費者の理解醸成活動など、本県の酪農業の振興に向けた新たな動きも見られている。



酪農教育ファームを地域の小学生が訪問

(3) 養豚

本県の養豚業は、飼養戸数が264戸、飼養頭数が288,900頭で、それぞれ全国で第9位、第11位であり菊池地域、天草地域を中心に広く飼養されている。1戸あたり飼養頭数は1,094頭で、全国の平均値を下回る（平成21年）。近年飼養戸数は減少傾向にあるが、飼養頭数は規模拡大により横ばいである。



「ひごさかえ肥皇」ロゴ

県では、県農業研究センターにおいて造成された高能力系統豚の血筋を引き、一定の基準を満たした豚肉について、「ひごさかえ肥皇（ひおう）」として農業団体とともにブランド化し、消費拡大を図

っている。

(4) 養鶏

本県の養鶏業は、採卵鶏で飼養戸数が64戸、飼養羽数が184万羽で、それぞれ全国で第21位、第25位である。



天草大王

また、ブロイラーで飼養戸数が88戸、飼養羽数が327万羽で、それぞれ全国で第6位、第8位である（平成21年）。近年採卵鶏では飼養戸数、羽数とも減少傾向にあるが、ブロイラーでは飼養戸数、羽数とも増加傾向にある。

県では、かつて天草地方で飼養されていた我が国最大級の鶏「天草大王」を県農業研究センターが10年の歳月をかけて復元し、農業団体とともに本県の地鶏として生産を推進している。

(5) その他畜種

本県では、95戸の農家において5,354頭の馬が飼養され、このうち80%が肥育馬である。飼養戸数は減少傾向にあるが、飼養頭数は肥育馬の増加に伴い増加している（平成19年）。また、91戸の農家でみつばちが飼養されているが、飼養戸数、群数とも減少傾向にある（平成19年）。

(6) 飼料生産

本県は、広大な牧草地が広がる阿蘇地域を中心に豊富な飼料生産基盤に恵まれ、飼料作物の作付（栽培）面積は21,300haで全国第6位である。県では、バンカーサイロ等の整備に対する支援を実施している。

また、自給飼料の増産及び転作田の活用のため、県内各地で転作田における飼料用米の生産が拡大しており、県でも飼料用米の給与等の実証試験に対する支援を実施している。

4 熊本県の畜産環境対策

本県は畜産業が非常に盛んであり、菊池地域などを中心として畜産濃密地域が形成されている。一方で、県内でも宇城、八代地域など耕種農業を主体とする地域もある。このため、家畜排せつ物の適切な管理および耕畜連携による利用は、本県農業の振興の上で極めて重要であり、関係者をあげて対策を推進している。

(1) 家畜排せつ物法の施行状況

現在、県内には2,182戸の家畜排せつ物法対象農家があるが、家畜排せつ物の不適切な管理は解消されている。また、このうちの簡易対応農家については、状況に応じ施設整備へと誘導しており、65戸まで減少している（平成20年12月）。

家畜排せつ物利活用施設などの整備にあたっては、国や（財）畜産環境整備機構などの事業を活用するほか、本県でも堆肥化施設や機械の整備に対し独自に補助を行っている。

なお、本県では毎年11月を「畜産環境月間」としており、関係者の意識啓発や現場の一斉巡回、県防災消防ヘリコプターを活用した上空からの巡視などの活動を行っている。

(2) 畜産環境問題に関する苦情の発生状況

農業県である本県でも、熊本都市圏を中心として居住地と畜産施設の混在化が進展しており、畜産業の健全な発展のため、地域住民との共存がより重要になりつつある。県では、苦情の発生に対しては、苦情主、苦情発生源双方の事情を踏まえながら、粘り強く問題解決に当たっている。

畜産に起因する苦情は、平成20年度で約100件発生しており、近年横ばい傾向にある。内訳では、悪臭関係の苦情が約6割を占め、横ばいからやや増加傾向にある。また、畜種別では、豚、乳用牛、肉用牛がそれぞれ約3割を占めているが、豚は減少傾向、乳・肉用牛は増加傾向にある。

(3) 家畜排せつ物の利用の促進

県内の堆肥生産量は年間約115万トンと推計されており、土づくり資材としての利用を基本に耕畜

連携を強化し利用拡大を推進することとしている。現在、県及び農業団体で構成する熊本県耕畜連携推進協議会が中心となり、堆肥共励会（本年度は130点の出品）や県内外の講師を招いての技術研修会の開催、ホームページ「くまもと堆肥ネット」(<http://kouchiku.aso.ne.jp/>)での地域の堆肥の情報提供、高品質な堆肥生産者を認定する「堆肥の達人」認定制度の創設（現在15名を認定）、農業フェアにおける消費者に対する普及啓発など、活発な活動を行っている。

堆肥の広域流通については、農業団体及び耕畜双方の生産者の積極的な連携により、菊池地域などの畜産地帯から熊本、八代、阿蘇地域、また福岡県八女地域などの耕種地帯への流通などが行われており、堆肥の広域流通量は年々増加し成果を上げている。

また、平成2年度から県独自の減農薬・減化学肥料栽培基準に基づく熊本型特別栽培農産物「有作くん」の認証を実施しているほか、本県の自然特性を生かした環境保全型農業の取組みを「くまもとグリーン農業」として推進しており、堆肥の利用促進とあわせて減化学・減農薬等による環境負荷



たい肥の達人認証マーク
たい肥 (Compost) の頭文字
「C」を使い、のびる新芽を包み込む
「土」を表現しています。

低減に取り組んでいる。

一方、家畜排せつ物の高度利用については、県北部の山鹿市において乳・肉用牛糞、豚糞を主原料としたメタン発酵処理が行われ、電力の場内利用、消化液の液肥利用が行われている。

5 終わりに

本県では、県政運営の基本方針となる「くまもとの夢4カ年戦略」を策定している。農林水産業を基幹産業とする本県は、蒲島郁夫知事のもと、「生まれてよかった、住んでよかった、これからもずっと住み続けたい熊本の実現」を夢とし、魅力的で、豊かな基盤を持ち、世界に飛躍する農林水産業の実現を目指しているところである。是非とも皆様には、本県の農林水産業に対しご理解、ご声援、ご指導を賜れば幸いである。



「有作くん」ロゴ